

滿

州

風

云

氣

北支那篇

六

圓明の燒打

非文化的暴舉……清朝五代の經營……天を移し地を縮む……歐洲宮苑に倣ふ……
艾佛の北京進攻……圓明園蹂躪さる……凄まじい掠奪……贓品の即賣會……圓明
園に放火……一大威嚇の所産

二九五

死の北京籠城

四十年前の慘劇……排外に狂ふ國匪……列國陸戰隊來る……救援隊遂に來らず……
暴動の火の手擧る……敵中に孤立無援……最後の時到来……焦熱地獄の苦しみ
……肅王府防衛は日本兵……三千の教民と食糧……豪華な砦と彈藥……東の間の
休戦……再び死闘を開始……死装束に身を固む

三三五

附録 日滿交流年表

裝幀・扉繪……甲斐巳八郎畫伯

三四五

序

過去半世紀のあひだ、滿洲は「亞細亞の火藥庫」或は「東洋のバルカン」として常に極東風雲の中心地と目されて來た。

日清戦役後、清國の黃龍旗が色褪せたと見るや忽ち露國の双鷲旗が躍進とひるがへり、日露戦役後、我が日章旗も亦南滿洲の一角に燦として打建てられた。

しかも帝政ロシアの双頭の鷲旗は蘇聯邦の赤旗と變り、黃龍旗はやがて中華民國の五色旗となり、五色旗は更に青天白日旗に易へられた。

かくして滿洲の天地には、國家興亡の争潮戦が展開されたばかりでなく、馬賊や黨軍閥は跋扈跳梁し、日・露・支・滿・蒙の民族は入り亂れて血みどろの民族争闘をつづけたのであつた。

併し、血で血を洗つたこの滿洲の風土時代も、滿洲事變後、民族協和を標榜する滿洲國の出現によつて一舉に拂拭され、色鮮やかな日の國旗と滿洲帝國の新五色旗の下、滿洲永遠の

平和が確立されるに至つた。

今にして思へば、血腥い過去の風雲時代こそは、實に滿洲建國に導入する前奏曲であり、また新國家誕生の陣痛期であつたとも言ふことができる。

本書に輯録した十數篇は、建國後約十年間に滿洲現地及び内地の諸雜誌に發表した滿洲の風雲時代相を物語る秘史秘譚であるが、これを滿洲の現實に照らすとき、そのまゝ躍進滿洲の苦闘史とも見るべきであらう。幸ひ著者は少年期から約三十年のあひだ此の地に在つて滿洲の風雲を身近に見聞し、滿洲建國にも馳せ參する光榮に浴した。日露戰爭當時特別任務班に參加した故松岡勝彦、大島與吉、鎌田彌助、森川兼藏、滿洲義軍の鶴岡永太郎等の諸氏とも相識る機縁に恵まれ、滿洲王國建設の雄圖を抱いて空しく林西城頭に戦死した蒙古の英雄バブチャツブの遺兒デヨンヂュールチャツブ君とは特に親しく交遊した。人質となつた從兄を助けて歸順した馬賊の副頭目とも直接面語したこともある。本書の各篇が、單に文獻のみによつて書かれたものでなく、ながい滿洲生活と、如上の人々との接觸により攝取され昇華されたものであることも特に附記したいと思ふ。

なほ、滿洲と關聯をもつ北支那に關する二篇をも加へ、日滿關係史年表を卷末に附した。こ

の年表は、本書の上梓に當つて大急ぎで編したもので、行文冗長の處はあつたが一讀して日滿交流の推移が窺はれるやうにと心がけたつもりである。

本年は恰も滿洲事變勃發十周年、建國九周年に當る。讀者幸ひにして滿洲往時の風雲を回想し、燿やかしい滿洲建國に對し更に一層の榮光を感得し得られるならば著者の欣懐これに過るものはない。

昭和十六年二月

在大連 金 丸 精 哉 識

日露開戦の前夜

前に軍港 後に要塞

明治三十六年の八月から九月八日までの間に、露國は滿洲から完全に撤兵する事を世界に公言してゐたが、約束の期日が來ても一向、兵を退かうとしないばかりか、日一日と軍備を嚴にしてゐた。

東洋一の要害と謳はれた旅順リュウシュンの主だつた山の頂上は全部一文字に切りとられて、その下に堅固なベトン製の要塞が匿されてゐる事は、どんな素人にでも容易に判断する事が出來た。

殊に旅順の港口に頑張つてゐる摺鉢すりばちを伏せたやうな黄金山の頂上には、どんな大艦隊だつて一歩も寄せつけるものかと言はんばかゝに數門の大砲が黃海に向けて末廣形に据ゑ付けてあつた。

その黄金山砲臺わうごんざんに守られた狭い港内には極東總督のアレキシエーフが、この五年ばかりに集めたレトヴィザン、ベレスウキート、チエザレヴィツチ、セバストポール、ポビエダ、パルラダ、バヤン、ボヤリン等、最新式の戦艦や巡洋艦が十六隻、もう立派な艦隊となつて港内一ばいに押し合ひ、へし合ひ碇泊してゐた。そして天日を蔽はんばかりに濛々たる黒煙を吐い

てゐるその艦隊の傍には、まるで木の切株でも並べたやうに短いマストを持つた夥しい水雷艇が塗られたのペンキの香をぶん／＼四邊に漂はせながら静かに息をのんでゐるのだつた。

「日本が一箇月開戦を遅らせりやあ、二隻づゝ水雷艇が殖えてくといふものさ」

腸詰のやうな鼻をしたロシアの水兵が鬚をもく／＼させながら、戦争成金のギンスブルグ男爵配下の御用商人に漏らしてゐた様に、その頃、旅順ではやつと出来上つたばかりの東清鐵道經由で聖ペテルスブルグから送つて来る分解した水雷艇を毎月二隻づゝ組立ててゐたのである。

光なき尖塔

海岸にはまさかの時の用意に幾つかの石炭の山が出来てゐたが、それと同時にはウオツカの間が、また山のやうに積んであつた。

町は兵隊の洪水で、一度水の中に落ちたが最後、當然、溺死するであらうと思はれるほど勳章をばいぶら下げた陸海軍の將校たちが、物に狂つた様にロシア式の客馬車（オモツカ）を驅りたてながら驚くべき急速力で往來してゐた。

どこの新開地でもさうである様に當時の旅順も非常に家屋が拂底してゐたので露人たちは支那人を追ひ出してはその支那家屋を白く塗りつぶして窓硝子をとり付け、何とかかんとか、それで我慢して住んでゐた。

ロシア人たちはこの天井の低い空氣の流通のよくない改造家屋をメノラスと呼んでゐた。そのメノラスの中は幾間にも仕切つてあつて、狭い馬小舎の様に板敷になつてゐる各室は外から南京錠をかけるやうになつてゐた。それでも新市街に建築中の宏莊なホテルが出来上るまではどうしてもさうした部屋で満足せねばならない状態にあつたので利に敏いアルメニヤ人たちは一室百留ぐらゐの^{ムラ}高い相場で間貸してゐた。だがそれらの部屋の利用者は大抵はこれぞといつて一定の職業を持たない、顔色の悪い荒んだ猶太人の若い女たちだつた。

もちろんメノラスのあるのは舊市街で、川向ふの新市街はまだ建設中であつた。舊市街は港と山とではぼ三角形をなしてゐる平地にあつた。その三角形の底邊が恰度、灣に面してゐて露亞銀行とか郵便局とか其他商館の多くは海岸通にあつた。

中にもクンスト・アルバースとかシイタス・プロツクといふやうな百貨店は、當時の旅順には過ぎたる存在であつたが將校や高官夫人連の虛榮心を満足させる様な商品を並べたててゐた

ので非常な繁昌であつた。

舊市街から新市街に出る一哩ばかりの港岸に沿つた道は結氷の時期ならまだしも、普通の時は何時でもおそろしい泥濘で非常に通行が困難であつた。

道にはまだ電燈や瓦斯燈もなかつたので街路の兩側にある板敷の人道を通つてゐる時など、歩く度に板の片端が持ち上つたりして一度や二度は必ず轉ふといふ有様で、女子供などはひどく惱まされたものである。

新市街ははじめから支那人の居住を許さなかつたので、建物も凡て西洋建築で、開戦の直前には破風が彼處此處にくつ付いてゐる獨逸式を眞似た建物が大分出來上つてゐた。參謀本部の建物はガツチリした石造の二階建てで、その隣りには工費約二十萬圓を投じたといふ豪華な將校集會所も建築最中であつた。

また港岸の一方には二千人を收容し得るといふ堂々たる三階建ての海軍兵舎が建てられ、老虎尾半島の裏側にもそれと同様な兵舎が落成された。

その頃、新市街と舊市街の間の灣に面してゐる山を切り開いて、その景勝の地にギリシヤ正教寺院の建築が着々と進められてゐた。金城鐵壁ともいふべき要害旅順とそこに住む人々をし

ろしめすであらう其の寺院の工事は、凡そ旅順に住む凡ての市民の注目を惹いたのはいふまでもない事で、狂信的な宗教心に燃える露人たちは「あの寺院の尖塔の十字架にはどんな遠い海上からでも一目で見られる様なすばらしい電燈がつくのだからです」と、口々に話し合つてゐた。——併しその十字架上の大電燈は永久に光芒を放つ機會を持つことはできなかつた。——

酒と女の軍都

舊市街に「サラトフ」といふレストランがあつた。テーブルクロスなど甚だ不潔ではあつたが、それでも旅順第一のレストランとして軍人さんで何時も大入満員だつた。

ロシアの士官は眞面目で行儀もよく、自國の純文學にも趣味を持つてゐるといふ様な者も多かつたが、中にはダンスで女優に戯れたり、無間笑劇に拳銃をぶつ放したり、軍刀を引抜いたりする亂暴者があつたし、兵卒などは大部分無學文盲な農夫が多かつたので、自然レストランなどの風儀も悪かつた。駐屯軍の多くは露西亞の各地方からの寄合ひだつたため、サラトフ軒お抱への樂隊はドンやヴォオルガの雜曲やタシケントやサマルカンド風の俗謡を奏樂し、ウオツカに酔ひ痴れた軍人たちはまたそれに合はして毎晩夜遅くまで飲めや唄への大亂痴氣を演ずるの

が常であつた。

サラトフ軒と前後して新市街に生れた「カツフェー・シャンタン」といふ小料理屋があつた。最初のはどは堅氣にやつてゐたが、やつぱり舊市街のサラトフ式にやらないと立つて行かないと見えて、しまひにはサラトフ軒やバレルモ軒などと同じやうに怪しげな場所になつてしまつて、果ては露國の士官が益々耽溺して行くので一時は閉店を命ぜられたぐらゐであつた。

とにかく陸軍も相當なものであつたが、海軍の青年士官などは特に不品行であつた。また基督降誕祭だとか復活祭だとか或は三位一體祭といふやうな祝祭日には、陸海軍は勿論官民は上下の差別なく一様に亂酔して、街上の露人で銘附してないものは一人もないといつていいぐらゐだつた。

明治三十七年の元日の日など、數十名の負傷兵が海軍病院に擔ぎ込まれて來たので、何處かで海戦でも起つたのだらうと見てゐると、それらの負傷兵はいづれも酩酊して馬車に轆かれたり、二階から轉げ落ちたり、或は酒亂の喧嘩で怪我したのだといふ事が判つてみんな苦笑したといふ話がある。

東郷司令長官の率ゐるわが艦隊の第一回旅順日襲撃の夜でさへ、新、舊市街のシャンタン、

サラトフ、パレルモといふ歓樂場は聖母マリヤの祝日といふので全く大入滿員の盛況だつた。

八

陸海軍俱樂部

陸軍俱樂部と海軍俱樂部は當時、旅順の二大社交場として毎週、舞踏會が開かれる事になつてゐた。

海軍俱樂部は支那のお寺の中に設けられてゐたので、時の軍都旅順の支配者として極不總督の顯職にあつたアレキシエーフの官邸に近く、大會の時には必ず總督が臨席する事になつてゐた。

舞踏會は何時でも非常な盛會であつた。殊に大多數が武官なので、その服裝が如何にも綺羅びやかで、金色燦然たる正裝の武官がチリン／＼と拍車の音をさせながら「マズルカ」などを踊るのを見てゐると、戦雲が今その脚下に湧いてゐやうなどとは夢にも想像する事は出来ないぐらゐだつた。

アレキシエーフ總督はそんな時でもかつて舞踏などした事はなく、何時でも上席を占めてロシヤ語のあまり出来ないスタルク提督夫人と獨逸語で談笑してゐた。

アレキシエーフ總督は、アレキサンダー二世とルーマニヤの一婦人との間に生れた私生兒で、それで現在の地位にあるのだ、といふ風説が専らであつた。たとへその風説が事實無根であるにしても、なるほどアレキシエーフ總督の相貌はアレキサンダー二世を髣髴するところがあつた。

總督は露支の親善について大に心を用ひてゐたらしく、新市街にある官立の小學校で新年宴會があつた時など、共學の支那人の兒童を集めてロシア語で露支親善を説き、すぐそのあとで露人の兒童に「この支那の兒童たちがロシア語を解するやうに、ロシアの兒童も支那語を解し得ないならそれは誠に羞かしい事だ」といふ様な訓示を與へたりした。

さて話は後へ戻る。——陸軍俱樂部でも海軍俱樂部と同様、毎週土曜日に夜會が催される事になつてゐた。その夜會は單に舞踏をやるといふだけでなく、面白い事には舞踏の後に必ず素人芝居を演ずる事になつてゐた。

その演劇といふのも、主としてトルストイ、チェホフ、グリボイドフ、チリコフ、アンドレーフ、ゴーゴリといふ様なロシア作家の戯曲か、或は英・獨・佛等の戯曲を選んで上演してゐたといふ事で、更に興味ある事は芝居の度に要塞司令官ステツセル將軍夫人が自身で立女形たてぢやまの

役を買つて出演してゐたといふ事である。

芝居といへば當時、旅順には紀鳳臺座といふ劇場が一つあつた。紀鳳臺きほうたいといふ露國に歸化した支那の御用商人の經營で、明治三十七年の正月にはロシアの名騎俳優が遊業して來て、チエホフやゴゴリ物を上演したらしいが、ゴゴリの「生涯」の時など大入だつた。

芝居よりも更に喝采を博したのはバロウスキー曲馬團の興行で、却々曲藝の巧い馬が出演してコーカサス生れの兵隊達をヤンヤといはせた。また毎年一回か二回、練兵場で競馬が催された。この競馬にはコリンスといふ名騎手が出場してゐた。コリンスは日本人と英國人の混血兒で、一時露國の將校連から最良にされてゐたが、開戦後間もなく露探の嫌疑で日本軍に逮捕されたといふ事である。

戦雲漲る

アレキシエーフ總督の機關紙だと評判されてゐたノーヴィクライといふ一週三回發行の露字新聞が旅順にあつた。主筆アルテムィエフ大佐以下、印刷校正の職工に至るまで従事員は凡て軍人で、その論說なども官製の極めて急進的な主戦論や黃禍論に終始してゐた。この新聞は明治

三十七年の一月一日から英文欄と支那字欄を設けて、極力英支に働きかけるなど大いに總督の機關紙振りを發揮したもので、旅順の陥落までずつと刊行を續行してゐた。

二〇三高地の頂上にぼつ／＼白いものが見られるやうになつた三十六年の十月八日、アレキシエーフ總督は海陸聯合の大演習を舉行した。

そしてその大演習が終つてから大連沖で大觀艦式を行つた。アレキシエーフ總督は式後、各艦を訪れて乗組の將士を激勵し「セバストポール」艦上では「往年セバストポール市民が英佛兩軍に對して如何に勇敢に防禦したかは諸子のよく知るところである。今日の露國人も一朝事あるに際しては、その祖先と同じく決して死を辭すべきではない」といふ様な訓示を與へたりした。

十月十一日の日曜日にはスワロフ練兵場で大閱兵式が行はれた。總督はこの時にも式後、二萬人の兵士（四萬人と宣傳してゐたが）と士官を集めて「……やがて、近き將來に於て露國皇帝と祖國の爲に奮つて諸子の忠勇を顯はさざるを得ぬ責務が來らんとしつゝある……」といふ意味の演説をした。

この閱兵式の當日、旅順在住の日本人たちは軍隊の數を推算したり、兵士の肩章を注意深く

觀察してゐたといふので、露國當局の忌諱に觸れ、それから五日目の十月十六日には海軍の新船渠に働いてゐた日本人の職工は全部解雇されてしまつた。

かうして極東の天地には戦雲が漠々と地を捲いて襲來してゐたにも拘らず、なぜか旅順の露人たちは最後まで戦争の起る事など信ずる者はなかつた。

ただ旅順における露軍の首脳部と日本とだけは充分に、末は雨だといふ事を知つてゐたのである。

アレキシエーフの意見を反映するノーヴィクライ紙は、陸海軍大演習の前後その社説の論鋒益々鋭く「露國は決して滿洲より撤退するものにあらず」と強調し、明けて三十七年の一月初旬には「滿洲は自今、露國の領土となつた」と前提して臆面もなく次の様な論説を發表して、彌が上にも戦意を仄めかしたつた。

「滿洲は將來、他國に征服される様な事はない筈である。刻下における日露兩國の交渉問題は單に朝鮮に關する件だけである。而してこの問題の如きも露國が若し強大なる自國の艦隊を旅順港に備へ、且つ三十萬の陸兵を滿洲に配置すれば露國に取つて都合よき結果を見るべきだ」後はこの論説に對してわが外務省から露國の當局に警告があつたと見へ、ノーヴィクライ紙